

大学生トップアスリートにおけるキャリア形成プログラム 開発へ向けた縦断的検討

清水聖志人* 島本好平** 久木留毅*** 土屋裕睦****

抄録

本研究は、大学生トップアスリートにおけるキャリア形成プログラム開発に向けて、大学生トップアスリートのキャリア形成とライフスキル(以下、LS)の関連を明らかにすることを目的として、高校及び大学生時代に優秀な競技成績を残して2011年3月に大学を卒業した男子レスリング競技者21名を対象に、大学卒業後から3年間にわたる4時点(2011年4月、2012年3月、2013年3月、2014年3月)の縦断調査を実施した(継続回答者21名)。各々の調査にはキャリアステータスを問う項目に加え、アスリートに求められるLSを10側面(目標設定、考える力等)から評価可能な「大学生アスリート用LS評価尺度」(島本ほか、2013)を用いた。卒業後のキャリアステータスをモニタリングした結果、卒業時点の正規雇用獲得者は7名、1年後には10名、2年後、3年後にはそれぞれ15名と経時的に正規雇用を獲得していることが明らかとなった。

また、3年後の状態をもとに希望就職獲得群(n=6)と未獲得群(n=15)を設定し、両群の卒業時点のLSを比較した結果、希望就職獲得群は未獲得群に比べ10側面全てにおいてLSのレベルが高く、「目標設定」(ES=1.01)と「最善の努力」(ES=.87)では10%有意水準で高い値を示した。本研究の結果は、LSとキャリア形成との正の関連を示すものと考えられた。

キーワード : Dual Career, 大学生アスリート, キャリア形成, LS, 縦断研究

* (公財)日本レスリング協会 2020 ターゲットエイジ育成・強化プロジェクト

〒115-0056 東京都北区西が丘 3-15-1

** 兵庫教育大学大学院 学校教育研究科

〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1

***専修大学 スポーツ研究所

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1

****大阪体育大学 大学院

〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台 1 番 1 号

Longitudinal Study with a View to Developing a Career-Building Program for Elite University Student Athletes

Seshito Shimizu* Kohei Shimamoto** Takeshi Kukidome*** Hironobu Tsuchiya****

Abstract

This study clarifies the relationship between career building and life skills among elite university student athletes, with a view to developing a career-building program for such athletes. For achieving this purpose, a longitudinal study was conducted using the data obtained from 21 male wrestlers who graduated from a university in March 2011 and achieved outstanding sports competition results during their time in high school and university. The study consisted of four surveys conducted over a three-year period (April 2011, March 2012, March 2013, and March 2014; number of respondents: 21). Each survey was based on the questions about their current career status, and also used questions from the Appraisal Scale of Required Life Skills for University Student Athletes (Shimamoto et al., 2013), which appraises life skills (LS) required for athletes based on 10 subscales (i.e., setting goals, thinking carefully, etc.). The monitoring of career status revealed the following: immediately after graduation, seven of the participants had gained full-time employment; one year after graduation, 10 were engaged in full-time employment; and through two and three years after graduation, 15 were engaged in full-time employment.

Based on the participants' career status three years after graduation, the participants were assigned into two groups, namely the employment-acquisition group (n=6) and the non-employment-acquisition group (n=15). Then comparison analysis was conducted for two groups in terms of their LS scores at the time of graduation. The results of this comparison revealed that the employment-acquisition group had higher LS scores than the non-employment-acquisition group for all 10 of the subscales. The results also revealed that the non-employment-acquisition group had significantly higher scores, at a 10% significance level, for the subscales "setting goals" (ES=1.101) and "always making one's best effort" (ES=.87). These results suggest that there is a positive correlation between LS and career building.

Keywords: Dual career, Elite university student athletes, Career building, Life skills, Longitudinal study

* Athlete Pathway Development Project Japan Wrestling Federation
3-15-1 Nishigaoka, Kita-Ku Tokyo, 115-0056

** Graduate School of Education Hyogo University of Teacher Education
942-1 Shimokume Kato Hyogo 673-1494

*** Institute of Sports Sensyu University
2-1-1 Higashimita, Tamaku, Kawasaki, Kanagawa 214-8580

**** Department of Sport Sciences Osaka University of Health and Sport Sciences
1-1 Asashirodai Kumatori Sennan Osaka 590-0496

1. はじめに

オリンピック競技大会をはじめとするエリートスポーツの闘いは、高焦点化の一途を辿っている。我が国においても、2011年にスポーツ基本法が策定され国策としてスポーツを推進することになったことに加え、2020年オリンピック・パラリンピック東京大会の開催、成功に向け、エリートスポーツの発掘・育成・強化がさらに加速すると推察される。

一方、競技レベルが高まる中で、高い競技成績を得るためには、長期に渡ってトレーニングや大会、遠征を中心とした生活を継続する必要がある、教育機会や就業、家庭とのバランスを保つことが困難となるケースが少なくない。

その中でもトップアスリート及びトップアスリート予備軍である「大学生トップアスリート」は、アスリートとしての活動（トレーニング・遠征等）による時間制約が影響し、大学卒業後の就職に支障が生じている現状が報告されている。清水ほか(2010)は、国際大会を目指し、非常に高度なレベルで競技に取り組む大学生トップアスリートを対象とした調査から、トレーニングや国内外における遠征による時間の制約等により、競技引退後の就職をスムーズに獲得することができない現状を明らかにしている。

先述のように国策として発掘・育成・強化を行ったアスリートが引退後も稀有なスキルを社会に還元する設えを構築することは、重要な政策課題といえる。

清水・島本(2011)は、「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」(WHO, 1997)等と定義される「ライフスキル」(以下、LS)が、大学生トップアスリートのキャリア形成を促す要因の1つとなりうる可能性を示唆している。清水ら(2011)は、大学4年次のトップレベルにある男子レスリング競技者を対象としてLSに関する調査を実施し、既に就職が決まっている競技者のLS獲得レベルを就職活動の形態から比較している。その結果、「自らの競技経験を生かせる職業に焦点を絞り就職活動を行った」群は、「何らかのコンネクションを利用した」群に比べ、スキルレベルが有意に高いことを明らかにし、LSの獲得が就職活動への積極的な姿勢を導くことを示唆している。

LSとは、「目標設定スキル」や「コミュニケーションスキル」、「ストレスマネジメントスキル」等の多様なスキルから構成される、学習可能な心理社会

的能力であり、「人々が現在の生活を自ら管理・統制し、将来のライフイベント(人生における重大な出来事)をうまく乗り切るために必要な能力」(Danish et al., 1995)とも定義されている。したがって、理論的には、「LSの獲得は大学卒業後の就職獲得に正の影響を及ぼす」との仮説を導くことができる。

また、先行研究からは、「目標設定」や「最善の努力」というLSと競技成績との間には、正の関連が見られることが多数報告されている(島本・米川, 2014; Shimamoto et al., 2014; 島本ほか, 印刷中; 清水・島本, 2012)。エリートアスリートは、LSを獲得するために競技に取り組んでいるのではなく、競技者としての目標を達成するために競技に取り組んでいると考えられるため、LSプログラム(以下、LSP)を開発するに当たっては、そこで対象とするLSと競技成績との関連を含めて構成する必要がある。

しかしながら、スポーツを通じたLSPの開発に関する研究、LSP実践の効果の検証に関する研究、LSと競技成績の関連が多くを占めており、LSを獲得することによって、それが具体的にどのような成果へと結びついていくのかについては、あまり研究が行われていない。

大学生トップアスリートを対象として、LS獲得と就職との関係を実証的に明らかにした研究は未だほとんど見られないのが現状である。

大学生トップアスリートに対して、効果的なキャリア形成プログラムを開発・実施していくためにも、高度なレベルにて競技を行う中でどの様なLSを獲得しているのか、LSの獲得がキャリア形成へと結びつくのか、仮にそうであるとすればどのようなタイミングで結びつくのか。また、就職後の昇進や転職、離職等のキャリアイベントとどのような関係にあるのかについて、縦断的に検証していくことが求められる。

2. 目的

本研究は、大学生トップアスリートにおける競技引退後のキャリア形成を円滑なものとする教育プログラム開発のための知見を得ることを目的としている。そのための視点として、「Life skills」と呼ばれる学習(獲得)可能な心理社会的能力に着目し、LSが競技引退後のキャリア形成に与える影響を検討していく。

研究方法として、大学生年代において高度なレベ

ルで競技を行い、優秀な競技成績を残してきた元大学生トップアスリートを対象に LS 獲得レベルと、キャリアステータスを3年間にわたって追跡調査を実施した。大学を卒業した元大学生トップアスリートを対象として、大学卒業後3年間にわたる4時点での追跡調査を実施することで「LS 獲得レベルと大学卒業後のキャリアステータス」との関連を検証した。

3. 方法

本研究は、元大学生トップアスリートを対象に縦断調査を実施した。調査結果をトップアスリートのキャリア形成プログラムにダイレクトに反映させていくため、単一の競技を選定し、長期縦断的に調査していく。日本のオリンピック競技の中から、国際競技レベルが高い競技を行う大学生アスリートを対象とするため、2012年ロンドンオリンピックにおいて金メダルを含む3個のメダルを獲得し、日本国内のレベルが世界トップレベルに位置していると考えられる男子レスリング競技を対象競技として選定した。

本研究において対象としたのは、2011年3月に大学を卒業した元男子レスリング競技者21名であり、大学卒業から3年間にわたる4時点の縦断調査を実施した。

大学卒業時点の調査にはアスリートに求められるLSを10側面(「目標設定」、「考える力」等)から評価することができる「大学生アスリート用LS評価尺度」(島本ほか, 2013)を用いた(表1.)。加えて、最終的に就きたい職業(希望就職)等の追加質問項目を設けた。その後の追跡調査には、就職の状況(キャリアステータス)に関する質問を試みた。縦断調査の結果を基に、LSの獲得レベルとキャリアステータスの関連に関して相関を分析することで、アスリートのキャリア形成支援に繋がる新たな知見の抽出を試みた。本研究計画は長期縦断研究における3年目終了時点の調査報告として位置づけられる。

本研究は、以下、3つの研究手法を用いた。

研究Ⅰ.卒業生のキャリアステータスに関する経時的変化

研究Ⅱ.卒業時点における希望就職獲得の経時的変化

研究Ⅲ.卒業時点のLS獲得レベルと大学卒業後のキャリアステータスの関連

研究Ⅰ. 研究Ⅱ. 研究Ⅲ. により、高度なレベルにて競技活動を行う中で獲得されたLSと卒業から3年後のキャリアステータス及び、希望就職獲得との関連を明らかにすることで、キャリア形成プログラム開発に向けた基礎的知見の抽出を行った。

調査協力者

調査協力者は、2011年3月に大学を卒業した男子レスリング競技者21名(初回調査実施時点の平均年齢 22.0 ± 0.2 歳)であった。大学への入学方法、生活環境、練習時間、そして、所属大学の競技レベルと、大学4年間の環境差異を少なくすることを目的に、東京、神奈川に所在する私立大学(計5大学、1大学あたり4—5名)に所属していた元大学生トップアスリートを調査協力者として選定した。研究Ⅰに関しては、4回の調査に不備なく回答した19名を対象とした。研究Ⅱと研究Ⅲには、初回調査と4回目調査に不備なく回答した21名を対象とした(継続回答率83.3%)。

調査時期

下記の時期に質問紙調査を実施した。長期的には既に実施済みの3年間の縦断調査と合わせ、計4年間の縦断調査となる。

- 2011年3月~4月
- 2012年2月~3月
- 2013年3月
- 2014年2月~3月

調査内容

アスリートにおけるLS評価尺度

島本ほか(2013)が現場の指導者の実践的な経験をもとに開発した尺度を初回調査において実施した。評定値が高いほどLS獲得レベルが高いと解釈される。

LS:「日本一」等の優秀な競技成績を達成した一流のスポーツ指導者たちの実践的な経験をもとに開発されたLS評価尺度(島本ほか, 2013)を用いた。同尺度はアスリートにおいてその獲得が強く推奨されるLSを、「ストレスマネジメント」、「目標設定」、「考える力」、「感謝する心」、「コミュニケーション」、「礼儀・マナー」、「最善の努力」、「責任ある

表1. アスリートリートに求められるライフスキルとその項目 (島本ほか, 2013)

	項目
ストレスマネジメント	悩み事は包み隠さず相談相手に打ち明けようとしている 悩み事は相談相手に素直に打ち明けている 悩み事を一人で解決できない時には、誰かに相談するようしている 悩み事はきちんと話を聞いてくれる人に打ち明けている
目標設定	強く意識しつづけるために、目標をノートやスケジュール帳に書き込んでいる 目標は考えるだけでなく、紙に書き込むようしている 一週間や一カ月、半年単位と、ある期間ごとに目標を立てている 目標を達成するための計画を具体的に立てている
考える力	あれこれと指示を受けなくても、次にどうすればよいか考えることができる 成功や失敗の原因を自分なりに分析してみることができる 問題や課題への解決方法を、自分自身で見出すことができる 周囲の人の考えをもとに、自分なりの答えを導き出すことができる
感謝する心	「ありがとう」の気持ちを素直に表現することができる お礼の言葉は、はっきりと声を出して伝えている 自分のことを支えてくれている人への感謝の気持ちを、いつも胸に留めている 家族や親しい友人であっても、感謝の気持ちはきちんと伝えている
コミュニケーション	チームのメンバーとは誰とでもコミュニケーションがとれている 同年代だけでなく、先輩や後輩、指導者ともうまく付き合っている チームのメンバーの前では本当の自分を表現することができる チームのメンバーとは、プライベートも含め幅広く交流するようしている
礼儀・マナー	試合中に悪質なヤジを飛ばすようなことはしない 対戦相手や審判に失礼になるようなことはしない 反則されても仕返しするようなことはしない 感情的な挑発行為や言動は行わない
最善の努力	なかなか周囲に認められなくても、辛抱強く努力しつづけることができる なかなか成果が出ない時でも、自分を信じて努力しつづけることができる 単調な作業の繰り返しでも、地道に取り組むことができる 目標の達成に向けて、一步一步着実に努力していくことができる
責任ある行動	同じような失敗を二度繰り返さないようしている ここぞという場面では、持てる力を全部出し切るようしている 失敗をした時には、すぐにその分を取り返そうと努力する 失敗から得た教訓を今後活かしている
謙虚な心	たとえほめられたとしても、いつまでもその事で浮かれることはない 過去の栄光や成功にいつまでもとらわれないようしている 調子に乗りそうな時でも、その気持ちをうまく抑えている いつも自分が絶対に正しいとは思わないようしている
体調管理	用もないのに夜更しをしている (R) 同じような物ばかり食べていて、食生活が偏食気味である (R) 適度な睡眠をとり、次の日に疲れを残さないようしている 食事は自分に必要な栄養素を考えながら摂取している

注) (R) : 逆転項目

行動」、「謙虚な心」、「体調管理」という計 10 側面から評価することができる(計 40 項目)。

キャリアステータスに関する質問

大学卒業後から 3 年間にわたる 4 時点(2011 年 4 月, 2012 年 3 月, 2013 年 3 月, 2014 年 3 月)の縦断調査を実施した。調査実施時点における就職状況について「正社員」、「契約社員」、「アルバイト等」との選択肢により尋ねた。

手続き

調査実施に際し、事前に各大学のレスリング部の監督やコーチに対して調査の趣旨説明を行い、調査実施の許可を得た。第 1 回目の調査に関しては、研究実施者が各大学のレスリング道場を訪問し、調査協力者に十分な説明を行った後に調査票を配布し、一斉法による実施後その場で回収した。その後の調査に関しては、郵送法にて実施した。また、継続調査を実施することから、すべての調査は記名式により実施された。

統計処理

大学卒業から3年後に希望(大学卒業時点にて)した就職を獲得している者と獲得していない者を2群に分け、LS獲得レベルと希望就職の関連を検証した。

すべての分析にはIBM SPSS Statistics 20.0を使用し、有意水準は5%とした。

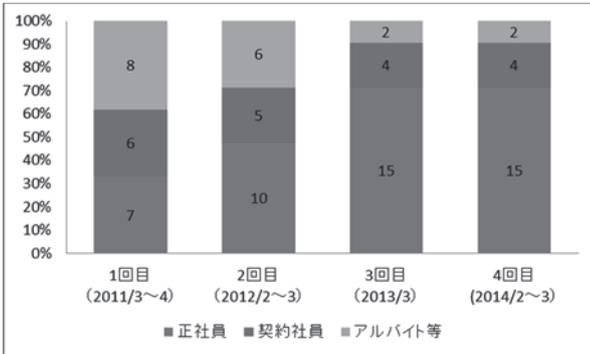


図1. 大学卒業後3年間にわたるキャリアステータスの推移

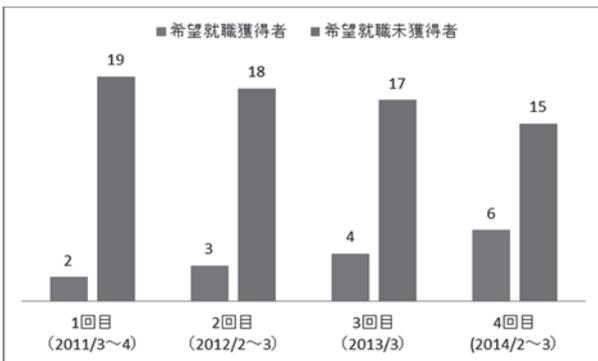


図2. 大学卒業後3年間にわたる希望就職獲得状況の推移

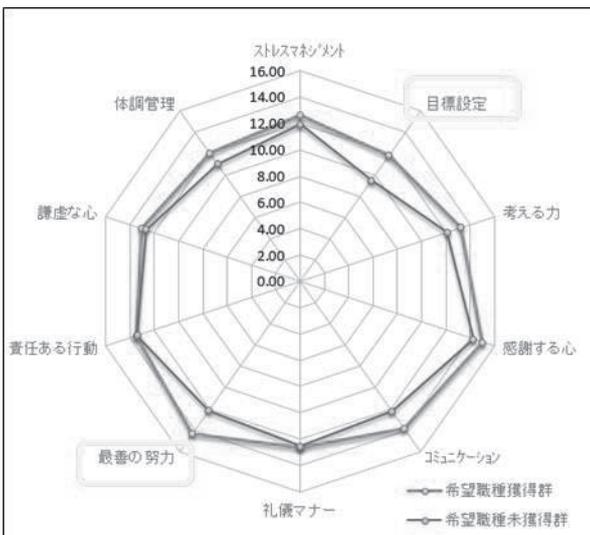


図3. 希望就職獲得群と希望就職未獲得群のLS比較

4. 結果及び考察

卒業後のキャリアステータスをモニタリングした結果、卒業時点の正規雇用獲得者は7名、1年後には10名、2年後、3年後にはそれぞれ15名と経時的に正規雇用を獲得していることが明らかとなった(図1)。卒業時点で希望している職業に就いている者も、卒業時点では、2名であったが、1年後には3名、2年後には4名、3年後には6名と経時的に希望している職業に就いていることが明らかとなった(図2)。

また、3年後の状態をもとに希望就職獲得群(n=6)と未獲得群(n=15)を設定し、両群の卒業時点のLSを比較した結果、希望就職獲得群は未獲得群に比べ10側面全てにおいてLSのレベルが比較的高く、「目標設定」(ES=1.01)と「最善の努力」(ES=.87)では10%有意水準で高い値を示した(図3)。

2群間にて有意傾向が見られた「目標設定」と「最善の努力」との間には、大学生レスリング競技者(Shimamoto et al., 2014; 清水・島本, 2012)に限らず高校生ゴルフ競技者(島本・米川, 2014)、大学生柔道競技者(垣田ほか, 印刷中)においても、中程度の有意な正の相関関係が認められている。

5. まとめ

本研究の目的は、大学生トップアスリートにおけるキャリア教育プログラム開発に向けた基礎的知見を抽出することであった。元大学生トップアスリートを対象に、大学卒業から3年間にわたる縦断研究を実施し、4時点におけるキャリアステータスの推移、希望就職獲得状況の推移に加え、卒業時点のLS獲得レベルと大学3年後の希望就職獲得との関連を検証した結果、以下の3つの知見を抽出することが出来た。

1. 卒業時点の正規雇用獲得者は21名中7名と低い正規雇用獲得率であったが1年後には10名、2年後、3年後にはそれぞれ15名と経時的に正規雇用を獲得していた。
2. 卒業時点で希望している職業に就いている者は、卒業時点では、2名であったが、1年後には3名、2年後には4名、3年後には6名と経時的に希望している職業に就いていた。

3. 大学卒業から3年後の状態をもとに希望就職獲得群と未獲得群を設定し、両群の卒業時点のLSを比較した結果、希望就職獲得群は未獲得群に比べ10側面全てにおいてLSのレベルが高く、「目標設定」と「最善の努力」では有意傾向が見られた。

本研究結果は、広義なキャリア教育の中でも大学卒業後や競技引退後に、希望職種への就職という点で貢献する可能性がある。将来的に自らが希望する職業を獲得するうえでは、「目標設定」、「最善の努力」という2つのスキルの獲得が重要であることが示唆された。

なお、序論において述べている様に、アスリートに教育プログラムを実施する場合、競技成績の向上にも貢献するプログラムを構成することが求められる。本研究において有意傾向が見られた「目標設定」と「最善の努力」は、いずれも大学生レスリング競技者において競技成績との正の関連が認められている (Shimamoto et al., 2014; 清水・島本, 2012)

よって、LSを活用したキャリア形成プログラムにおいて、「目標設定」、「最善の努力」を中心としたプログラムを構成することで、競技力向上とキャリア形成の双方にとって有益なプログラムの開発に繋がる可能性が考えられる。

今後は、本研究をさらに追認することで高度なレベルにて競技を行う中で獲得されたLSがキャリア形成や就職獲得に結びつくのか。また、就職後の昇進や転職、離職等のキャリアイベントとどのような関係にあるのかについて、縦断的に検証していくことが肝要となる。

参考文献

Danish, S. J., Petitpas, A. J., and Hale, B. D.(1995)Psychological interventions: A life development model. In : Murphy, S. M.(Ed.)Sport psychology interventions. Human Kinetics: Champaign, IL, pp.19-38.

垣田恵佑・島本好平・山本浩二・永木耕介・佐藤康宏 (印刷中) 大学生柔道実践者におけるライフスキルの特徴. 講道館柔道科学研究会紀要.

Shimamoto, K., Shimizu, S., and Tsuchiya, H. (2014) The relationship between life skills and competitive result of wrestlers. 7th ASPASP International Congress.

島本好平・東海林祐子・村上貴聡・石井源信(2013) アスリートに求められるLSの評価—大学生アスリートを対象とした尺度開発—. スポーツ心理学研究, 40(1) : 13-30.

島本好平・米川直樹(2014)高校生ゴルフ競技者におけるライフスキルと競技成績との関連. 体育学研究, 59:817-827.

島本好平・垣田恵佑・山本浩二・永木耕介 (印刷中) 大学生柔道実践者におけるライフスキルと競技成績との関連. SSF スポーツ政策研究.

清水聖志人・高橋義雄・河野一郎(2010)大学運動部の指導・運営内容差異による就職状況の比較—レスリング競技者を対象として—. スポーツ産業学研究, 20(1): 119-129.

清水聖志人・島本好平(2011)大学生トップアスリートのキャリア形成とLS獲得との関連. 日本体育大学紀要, 41(1): 111-116.

清水聖志人・島本好平(2012) 男子大学生レスリング競技者におけるライフスキルと競技成績との関連, 体育経営管理論集, 4 : 47-53.

WHO(1997). 川畑徹朗・西岡伸紀・高石昌弘・石川哲也監訳 WHO life skills educational programs(pp.9-30). Tokyo: Taishukan.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

